

知財情報についての雑感

元 JIPA 知的財産情報検索委員会 委員長
臼井裕一

アジア特許情報研究会が昨年末に、設立 10 周年を迎えられ今年記念講演会を開催されるとのこと、誠におめでとうございます。これに関連して代表の伊藤さんから何か寄稿文をと依頼されていたのですが、何しろ現役を退いてから 10 年近くが経過し、その間知財情報には殆どかかわっていませんでしたので最近の情勢にも疎くまとまったことは書けそうにありません。

しかしながら、かなり長い間情報に係わってきましたので、私の拙い経験も何か若い方々の参考になるかとも思い直し、お受けすることにいたしました。しかし、ちょっと事情があって提出が大幅に遅れました。伊藤さん、どうもすみませんでした。

どのように書こうかと迷いましたが、回顧録風に情報とのかかわりを記してみようかと思えます。

まず私が入社したのは、1973 年で社内の設備関係を担当する部門に配属となりましたが、2 年ほどで研究開発本部に異動し主として光ファイバの開発に携わってきました。そのうちでも特に光ファイバ・ケーブルの接続を主に担当し、光ファイバの接続方法、接続装置の開発を行いました。この頃は情報の入手は紙ベースで、論文誌や特許抄録誌が回覧されるので、気になる論文や気になる特許についてはコピーしてファイルしておくという程度でしたが、特許については必要と判断したものは、明細書を取り寄せてこれもファイルし、グループとして紙ファイルという形で一応の共有化を図っていました。

その後、1990 年に研究開発本部内に研究に関連した情報をまとめて管理する組織としてテクノリサーチセンターが発足し、そこへ異動しました。この組織は、研究に関連した全ての情報を取り扱うということで研究部門で使用する商用データベースから図書管理、また研究報告類の管理などを行うことになりました。この組織はその後知財部門と共に 1997 年に分社化して住友電工知財テクノセンター株式会社となっています。

このような経緯でそれまで装置の開発で CAD を使って設計などを主として行っていたのにいきなり情報をとと言われて戸惑ったのは確かでした。研究者として個人的にスタンドアロンで市販のデータベースソフトを使用したり、一部商用データベースの PATOLIS を使用したりははしていたものの、まとまった知識やスキルはないに等しい状態でしたから。

まずはまとまった知識とスキルを得ること、このために行ったことは次の2点でした。一つは当時はやっていたパソコン通信の NiftyServe 中の「サーチャー倶楽部」に入ること、もう一つはサーチャー試験を受験することでしたが、結果的にはこれは正解でした。「サーチャー倶楽部」では質問しまくりでしたが、即時に親切で丁寧な回答が得られました。後には、私も可能な限り他の方の質問に答えるようにしましたが、これがものすごく自分の勉強になりました。またいつの間にか情報に対する感性が磨かれたように思います。サーチャー試験については、91年度に2級、93年度に1級に合格することができました。

その他に、外部の委員等もやらされましたが（やらされたというのは個人的意見ですが）振り返ってみれば、これも凄く為になっています。具体的には、EPI 協議会、技術情報業務連絡会、研究産業協会の研究情報委員会、日本知的財産協会の知財情報検索委員会などです。社内に籠っていても視野が狭くなります。特に異業種の方々の忌憚のないご意見はすごく役に立ちました。

さて、ここからが知財情報について思うところです。まず特許情報のデータベースについて（これは別に特許情報に限りませんが）ですが、まず商用のデータベースですが、これはご承知のように、まずは化学系から始まりましたが当初は抄録ベースのデータベースがほとんどでした。無論ファクトデータベースは除きますが。これは、論文誌にせよ特許情報にせよ原本が紙ベースであるため、抄録からその論文や明細書を読むかどうか判断するためのものと捉えられるでしょう。結局、抄録を作成するのに手間がかかるため、どうしてもタイムラグがあることと高価になることは避けられませんでした。また特徴として統制語が用いられるため、たとえ原本にその語が用いられていなくても統制語によってキーワード検索ができるという利点がありました。これは当時国内唯一の特許情報データベースの PATOLIS でも不十分ながらフリーキーワードとして付与されていました。

これら抄録ベースのデータベースから大きく変わるのが全文データベースの出現です。個人的にはデータベース環境が大きく変わるのは、この時点であったと思っており、特許情報でいえば電子出願、論文誌では電子出版が契機となるわけですが、更にほぼ同時期にインターネットの一般への開放（日本では1994年だったと思う）が大きく寄与していると思います。特許情報のデータベースでいえば、元データは安価に入手でき、インターネットを利用して安価に提供できるため2000年前後から特許情報の全文データベースが雨後の筍のごとく出現してきました。これらの特徴としては、電話回線プラス通信ソフトによる接続ではないためそれまでのような時間課金はなくなり、料金体系すら変わってきました。時間を気にせずゆっくりと考えながら検索ができるということで検索に精通していない人でも何となく検索ができるようになってき

たため、エンドユーザー検索も本格化するものと思われたのがこの頃のことです。ただ実際には、統制語が付与されていないのでキーワード検索では考えられる限りの同義語で OR をとらないと漏れが生じるのが危惧される等の難しい面も指摘されました。この観点から 2000 年代の前半頃に「概念検索」が出てきたのも何となく理解できることといえるでしょう。今現在でも、このような点は本質的にはあまり変わっていないと思っていますが、ここではあまり触れないでおきましょう。

それでは、ここらで特許情報の検索には何が必要かという話に行きましょう。知識として必要なのは技術内容についての知識、知財についての知識、そしてデータベースについての知識でしょう。このうちどれが重要かということは特になのですが技術内容が全くわからないのはかなり致命的ではあります。その意味では研究者自らが検索できるのが一番良いようにも思えますが、これは私が研究者の出であるからそう思うのかもしれませんが。そうでないのならこの辺りはインタビューの能力ということになるのですが、それにしても最低限高校の物理、化学程度の基礎的な学力は必要と思われる。

まず検索すべきは何かをしっかりと把握し、その後実際の検索を行うが、この際理想的な結果を想定して、今現在はその理想集合のうちどこを検索しているのかをきちんと把握しているかを常に意識して行うべきでしょう。例えば F タームで検索するとき異なるテーマコード間で AND を取った時にそれは何を検索しているのかきちんとわかっているのか等のことです。要はベン図を頭の中で意識しながら検索しているかということですが意外ととんでもないところを検索している人がいるものです。

次に特許情報を基にした分析や解析についてですが、これも全文データベースの出現と無関係ではないと思いますが、やはり 2000 年代の前半にテキストマイニングを利用した Aureka に代表されるような分析解析ツールが多数でてきました。これは特許群をいれてやると勝手にマップを作ってくれるものという印象が強いのですが、この頃にこれはちょっとやばいかなと思ったのが実感です。多分、同時期に出てきた「概念検索」が通常のサーチャーが行う検索と同等以上になるようなときには意味がある結果が出るのかもしれませんが、いずれにしても中で何をやっているのかわからないというのは評価以前の問題だと感じました。

ところで、通常の特許マップは非常に有用であると感じています。私が初めて特許情報を基に分析を行ったのは研究者の時代ですから 1990 年よりも前ですが、この時は競合他社の開発体制の特許の発明者のデータを利用して分析しましたがデータとしては PATOLIS データでそれを表計算ソフトに入れましたが、一番苦労したのが元データでした。当時 PATOLIS は、そのようなことは想定していなかったようで検索結果は検索時自動でフロッピーに保存されてしまいますが、その結果は一度だけプリントアウト

トできるだけという縛りがありました。この時は別途支払いを行って使用できましたが、元データの入手が難しい時代でした。

最近では IP ランドスケープというのがトレンド (?) となっているようですが、多分同様のことはかなり昔からやっているはずで特許情報を基にしたマップはそれだけで何かを判断することは難しいので他の情報と合わせて判断するのは当然だと思っています。2000 年代の初め頃に知財協の検索委員会でマップを使用しての分析・解析をテーマとして行ったときにも確か特許マップの他に新聞記事情報や企業情報、マーケティング情報、法改正情報等と合わせて解析を行ったと記憶しています。

特許マップのツールは進化しているとはいえ、基本的には表計算ソフトでも出来ることを容易に短時間で効率よく出来るようにしたものだと捉えています。マップは、作成する過程で様々なことが理解できてくる点が非常に優れているといおうかよい点であると感じています。その意味では勝手にマップのようなものを作成してくれて、その結果から何かを読み取っていくというのはちょっと違うかなと思っています。

また同じように最近、AI というのをよく聞きますが、これも例えば分類付与等については、10 年以上前から自動付与を一部ではやっているはずですし、敢えて AI というのはどうかなと思うものも多いように感じています。将来的には自動学習して AI と呼ぶのにふさわしいようになっていくのだろうけれど、何でも AI、AI というのは却って足を引っ張るのではないかと懸念しています。

この辺りは、私の理解が不足しているのかもしれませんが、日本語それ自体の曖昧さという論理的でない点が随分影響しているように思います。

最後に、あまりまとまった話にはなりませんが、情報に関して一つだけ言うとする、「自分の頭でよく考えてほしい」ということだけです。最近も知財情報を巡る環境は大きく変わりといわれていますが、これは常に何時でも同じように言われ続けています。まあ、常に変わり続けていてそれに対応し続けなければならないと思っていればいいだけのことですけれどね。まだまだ言い足りないことはたくさんありますが、この辺で。